



日本画家

さかもと ゆきしげ
坂本 幸重さん

Profile

1954年熊本県生まれ。1980年に第15回日春展・第12回日展に初入選。1991年の山種美術館賞展で『鮭』が大賞を受賞。現在は県美術会常任理事を務める。

絵画で伝える、挑戦の心

学

生時代は剣道に打ち込み、絵とはかけ離れた生活を送っていた坂本さん。19歳の時、日本

画の巨匠である東山魁夷（ひがしやま けいゐ）の小さな画集を手にとったことをきっかけに、画家への道を歩み始めます。

画集に感銘を受けた坂本さんは、予備校で絵を学び始めます。美術大学に合格することはできませんでしたが、それでも諦めずに描き続け、26歳で日春展と日展に入選。翌年には日展の評議員だった川崎春彦先生に弟子入りし、研さんを重ねます。「先生との巡り合わせに感謝しています。一流の先生から学ぶことができて幸運でした」と当時を振り返ります。

やがて、山種美術館賞展への出品のチャンスが来ると、一心不乱に絵を描き続けます。「あの頃は若かったから、朝から晩まで、飯も食わずにコーヒーばかり飲んで描き続けた」と笑いながら話す姿の中に絵を描くことへの情熱が感じられます。3カ月ほど本気で絵を描き続けた結果、第11回山種美術館賞展で『鮭』が大賞を受賞しました。新聞紙の上に載せられた

2匹のサケを描いたこの作品は、うろこの一枚一枚、新聞紙の細かな文字に至るまで描写され、その写実表現に驚かされます。

「自分が納得できる作品を作るには時間がかかる。ゴールが見えない中で、自分を信じて突き進む勇気がどれだけあるか、画家として芽が出るまでの時期が一番苦しい」と語ります。それでも、「初めて会う人から『絵を見ましたよ』と言ってもらえることが一番うれしい。それに、絵には描く人の心が表れるから、見てくれた人に自分の意図が伝わったときもうれしい」と笑顔で話します。

今後は、その土地に根ざす人々の力強さを描きたいと語る坂本さん。20年以上の月日を藤岡で過ごす中で、畑で作業をしている農家の様子を日常の風景の一部として見てきたことがきっかけだといいます。

絵を描くことを通じて、諦めずに挑戦することの大切さを伝えるとともに、諦めずに頑張っている人の手助けをしたいと意気込みを語ってくれました。